うもれ木

魚津埋没林博物館広報誌

第 4 号

発 行 日：平成８年１月31日
編集発行：魚津埋没林博物館
印　　刷：魚 津 印 刷 ㈱

白い花、紫の花
…どちらもオオアキギリ

オオアキギリ（シソ科）は、魚津市周辺の山間部にも普通に生え、秋に濃い紫色の花（写真右）が咲きます。しかし、紫色とばかり思っていると、中にはごくまれに左の写真のような白い花のものがあります。この株は市内の片貝川上流で見つけましたが、遠くから見ると、何の花か一瞬分かりませんでした。花の色が違うとずいぶん印象が変わるものです。

ちなみにオオアキギリはサルビアの仲間です。

蜃気楼雑感

管理課長　大森敬二

埋没林博物館の隣接地は、魚津市指定の蜃気楼展望地になっている。付近の海岸には3月中旬頃からの蜃気楼出現のシーズンをむかえると、報道関係者や魚津蜃気楼研究会のメンバーが集まる。カメラやビデオをセットしながら、いろいろの蜃気楼の話題や出現予想、世間話などをしながら今や遅しと蜃気楼を待ち構えている。一年ぶりの再開の喜びもあり楽しい雰囲気で、春の日永の海岸の情景である。

蜃気楼出現の予想される日には、それぞれ思い思いの時間に様子見や期待感と興奮が交差する中、ぞろぞろと見学者が増えてくる。

こうした中で出現しそうな気配となると、誰からともなくどよめきが起こり、その方向に耳目が集中する。出現の瞬間を見逃さないぞとばかりに固唾を呑んでじっと一点に集中する人もあれば、ある人は別の方向を見つめたりしながら、それぞれにシャッターチャンスをうかがっている。

このように出現しそうな気配のときや、いざ出現というときになると博物館の事務室もてんやわんや大変である。海岸で双眼鏡を覗きながら状況を観察する担当や、ひっきりなしにかかってくる電話の応対、観察現場との連絡や関係機関への迅速な対応などが生じてくる。

出現した蜃気楼の状況と経過を予想して合図の花火打ち上げを決定する。

ドーン！ドドーン！蜃気楼出現合図の花火である。

▲花火の打ち上げ

合図打ち上げから数分のうちに、海岸周辺は数百㍍にわたってざわざわと賑やかな人垣で埋まる。時によって数十分から長いときで数時間続くこの光景の中には、蜃気楼がよく見えなかった様子の怪訝そうな顔、蜃気楼を見た満足感や充実感があふれる笑顔などいろいろな顔が見える。

▲蜃気楼を待つ

そのなかで蜃気楼研究会のメンバーは、カシャ、カシャと一心不乱にシャッターを切る傍ら、見学者の中に蜃気楼がよく分からない人には説明をされている。さらによく見たい人に双眼鏡を貸してあげたり、用意してきた写真で解説されるのでほとんどの人が納得され、大満足である。さらに遠方からの方にサービスで写真をおみやげに渡されることもあり、感謝感激である。まさに蜃気楼大使というべきでなかろうか。

館の窓口では、花火が打ち上げられたときには蜃気楼を見たと証明する蜃気楼の写真入台紙〝天下之奇観〟に記念スタンプを押したものと、〝君は蜃気楼を見たか…〟にはじまる〝証〟をお渡しする。多いときには数百人にもなり、対応も大変なものであるが、蜃気楼を見た幸運な方々には一生の大切な記念になるらしい。

しかし、シーズンを問わず他の花火の打ち上げで、蜃気楼が出現したのかと電話がジャンジャンとかかってくる場合もあり、ありがた迷惑とも言えるが、名物でもあり、一般の関心の高さからなのだろう言ってはいられない。

平成7年度は魚津蜃気楼研究会の協力により秘蔵の蜃気楼写真展やビデオ上映を行い好評であった。特にうら盆の帰省客などには懐かしい様子でもあり、実際の蜃気楼をぜひ見たいとの感想が多かった。出展協力してくださった研究会の方々のおかげである。今後もこの写真展などの行事を続けられればと願いつつ、春の蜃気楼シーズンが待ち遠しいものである。

シリーズ　埋没林の仲間たち ④

ミズキとクマノミズキ

Cornus controversa Hemsley, C. brachypoda C. A. Mey.

ミズキはミズキ科の落葉樹で、高さは20ｍくらいになります。漢字で書けば「水木」で、特に春の芽吹きの時期には、枝を折ると樹液がしたたり落ちるほど水分が多いのでこの名前がついたということです。この木の木材は目が細かく、柔らかくて加工しやすいので、細工物や器具、印鑑などに利用されます。

ミズキは野山に普通に生え、５月頃に白く細かい花が枝先に密集して咲き、遠くからも目立ちます。10月頃には、直径５㎜ほどの球形で黒っぽい果実がなります。ミズキの枝は四方にほぼ水平に伸び、木全体の形が棚のようになるのでほかの木とは一目で区別できます。

ミズキ全体

クマノミズキはミズキによく似ていますが、葉がやや細く、ミズキよりも尖っています。もっともよい区別点は、ミズキの葉が１枚ずつ互い違いにつく（互生：ごせい）のに対して、クマノミズキは２枚ずつ向かい合ってつく（対生：たいせい）ことです。

ミズキの名前からハナミズキ（花水木）を連想した人も多いのではないでしょうか。街路樹や庭木としてよく植えられるハナミズキもミズキ科の仲間ですが、春から初夏の花の時期に白やピンクの大きな花弁のようなものがよく目立ち、ミズキとはかなり印象が違います。花弁のように見えるのは、花の集まりを包んで保護する「総苞片（そうほうへん）」というものです。ハナミズキは別名をアメリカヤマボウシといい、北アメリカが原産です。日本にはこれに似たヤマボウシが自生し、白い総苞片が目立ちます。ヤマボウシの実は赤く熟して食べられます。

ヤマボウシ

ほかに「…ミズキ」と名のつくものに、トサミズキやヒュウガミズキなどが庭木としてよく知られていますが、これらはミズキ科ではなくマンサク科の植物で、ミズキの親戚ではありません。

魚津市の丘陵や山地にはミズキ、クマノミズキ、ヤマボウシのいずれも見られ、そのほかミズキ科の仲間ではハナイカダ、ヒメアオキなどが自生しています。

魚津埋没林では、1989年の調査でミズキとクマノミズキの核（種子を含む固い部分）が発見されています。

（学芸員／石須　秀知：いしず　ひでとも）

この展示物☆ここに注目

保存１号館の大樹根

保存１号館には、昭和５年頃に出土した埋没林の根と幹が合せて３点保存展示されています。そのなかでも特に他を圧して大きいのがこの樹根です。全体の直径約５ｍ、幹の抜けた部分の直径は約２ｍあります。

昭和５年、魚津港の建設のため海岸の砂浜を掘り下げたところ、大小合わせて200株以上の根が発見され当時の関係者を驚かせました。今日のような大型の建設機械がない頃なので、工事を進めるには大変な苦労があった

と思われます。樹根を取り除くにも人の手で切断しなければならなかったようです。

ここに展示されている大樹根は、よく見るといくつかに分断されています。また、根を切り離した断面にも苦労の跡が読み取れます。

この保存１号館では、実際に埋没林の樹根に手を触れてその感触も確かめられます。大きな樹根に手をあてると、2000年近くもの時を超えて木の温もりが伝わってきます。この温もりを感じながら、大古の大森林に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

（学芸員／石須　秀知：いしず　ひでとも）

行事報告

▲蜃気楼写真展

平成７年４月～平成８年１月

４月21日	入館者40万人到達
５月27日	海岸・川原の植物と鳥の観察会
７月10日	蜃気楼写真展（～8/31）
８月１日	企画展「人と植物」（～10/31）
９月23日	平沢の沌滝とトチノキ林見学会
11月９日	入館者50万人到達
12月27日	水中展示樹根清掃
１月２日	写真展「水の姿」（～3/31）
１月26日	文化財防火デー消防訓練

▲平沢の沌滝見学会

▲入館者50万人到達

ご利用案内

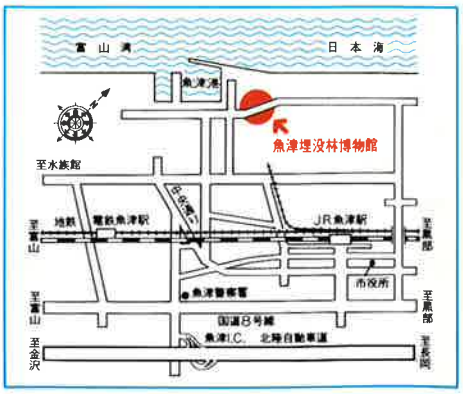
○開館時間　午前９時～午後５時（入館は４時30分まで）

○休 館 日　12月～３月の月曜日、祝日の翌日、年末年始（４月～11月無休）

○入 館 料　・大人（高校生以上）…500円　・小中学生…250円

○交　　通　・ＪＲ北陸本線／・富山地方鉄道　魚津駅下車（タクシー…５分／徒　歩…15分）

・北陸自動車道魚津ＩＣより車10分



特別天然記念物　**魚津埋没林博物館**

〒937 富山県魚津市釈迦堂814 ☎(0765) 22－1049